森林と人を生かす知恵 152

つる植物の使い方

造林の厄介者を使う

岐阜県立森林文化アカデミー　准教授●大洞　智宏

つる植物

つる植物は、固い幹で自身を支えながら成長するのではなく、他の植物などによじ登りながら成長する植物です。

よじ登る方法にはいくつかのタイプがあり、フジやマタタビのように巻き付きながらよじ登るタイプ（写真1）、ツタ、テイカカズラのように付着根を出し幹などに張り付くタイプ（写真2）、ヤマブドウのように巻きひげを利用するタイプ（写真3）、カギカズラ、ツルグミのように体の一部を枝などに引っ掛けて寄りかかるタイプなどがあります。

林業とつる植物

植林を行った後は、植えた木がうまく育つように、下刈りなどの保育作業を行いますが、その中には「つる切り」という作業があります。「つる切り」は苗木の生育を邪魔するつる植物を切断し、つるを幹から取り除く作業です。これを行わないと幹が変形したり、梢部分が曲がったり、つる植物に覆われてしまい光合成が十分できなくなるなど苗木のその後の成長に大きく影響を及ぼします。このため、林業ではつる植物は駆除の対象となってきました。

しかし、同時につる植物は人間の生活には欠かせないものでした。例えば、かずら橋のように大きな構造物や、カゴ、ザルのような日用品を作ったり、繊維を取り出し布を織るなどその利用は多岐にわたりました。

つる植物の利用

昔から様々な種類のつる植物が利用されてきました。では、どんな植物がどのように利用されてきたのでしょうか。代表的なものを紹介したいと思います。

クズ（葛）

根から澱粉をとり、くず粉として古くから利用されてきました、また、「葛布」という布がつるから取り出した繊維で織られてきました。

フジ（藤）

春には各地の藤棚で美しい花が目を楽しませてくれます。また、つるの部分でカゴを編んだり、繊維を取り出して「藤布」と呼ばれる布が織られてきました。

ヤマブドウ（山葡萄）

果実は食用にされるため栽培されジャムやワインに加工されています。樹皮で編まれたかごは高級品として流通しています。

アケビ（木通）

種の周りの甘い部分だけでなく、皮の部分を炒め物にするなど食用にされています。つるはカゴなどを編む材料として使われています。

つる植物は、林業の中では厄介な植物ですが、山沿いの明るい場所などに生える身近な植物です。布を織るのは大変ですが、果実を食べたり、つるでカゴを編んだりするのは簡単にできます。林業での作業のついでや、採取しても良い場所であれば採取して使ってみてはどうでしょうか。

写真1

写真2

写真3

●詳しい内容を知りたい方は　TEL (0575) 35-2525　県立森林文化アカデミー まで